

第2章 生産、賃銀、利潤（前半）（岩波文庫P 23 ～ 30）

司会…約16ページに及ぶ長い第2章にチャレンジしてくれたのは三好市職

友の会の東口忍さんです。この章は、マルクスの「賃金額固定論」に対する批判です。3月号・4月号の二回に分けてレポートと討論を発表していきます。それでは東口さん、前半のレポートをよろしくお願います。

ウェストンの一貫した主張

ウェストンの主張はこれまでも一貫しています。「賃金を上げて、物価が高くなるだけで、労働者のためにな

らないから無意味である」として、次の推論を打ち出します。

「労働者がこれまでの4シリングから賃上げして5シリングを受け取るなら、資本家は4シリング相当の商品を5シリングで売り渡すだろう。」

確かにこれであれば賃上げは無意味ですが、なぜこうなるのでしょうか？それは、彼の主張の前提がそもそも「賃金額が不変」だからそうなるのです。ではなぜ賃金額は「4シリング相当の商品」と決まっているのでしょうか？これが正しいなら次の2点が証明されるべきです。

①賃金額の限界は、資本家と労働者の意志から独立した経済法則によって決まる。

②常に実際に支払われる賃金額は、その必然的な賃金額と厳密に一致し逸脱することはない。

もし賃金額の一定の限界が資本家の単なる意志に基づくなら、それは恣意的で必然性ではありません。実際に資本家は、自身の売る商品の価格を引き上げて4シリング相当の商品を5シリングで売るので、商品、商品、商品もまた資本家の意思によって決まるのでしょうか？

◆特集 みんなの学習講座

賃金高騰は商品価格に

どう影響するのか

そこで、貨幣価値や資本と労働の分量も変わらず、単に賃金だけが高騰した場合の商品価格はどうなるのでしょうか？ その商品の需要と供給の比率によって影響が出てくることになりま

す。つまり、労働者階級は、大抵自分の所得を生活必需品に費やしており、賃金の高騰は、それまで十分に買えなかったために生活必需品に対する需要の増加を生みます。その結果、生活必需品の市場価格の騰貴を引き起こすということになります。

の埋め合わせはできない上に、自身が消費する生活必需品を手に入れるには高騰した価格で入手しなければならず、これまでのようにぜいたく品の購入はできなくなります。

需要と供給による調整

結果として、資本と労働は、儲けの少ない部門から儲けの多い部門に移動することになります。この過程は、一方では需要の増加に比例して供給が増え、他方では需要の減少に応じて供給が減るまで続き、その後、需要と供給が均等化されると、価格も一般的なものになるのです。つまり、市場価格が若干動揺した後、諸商品の交換価値は、もとの水準に落ち着くのです。賃金率の一般的高騰の結果起こるものは、結局のところ、利潤率の一般的低下以外の何ものでもないのです。簡単に言い換えれば「労働者の取り分が増え、資

本家の取り分が減るだけ」ということです。つまりウェストンの言う、賃金の高騰により商品価格が上がるというのは誤りであるのです。

有名なスプーニーってなんだ

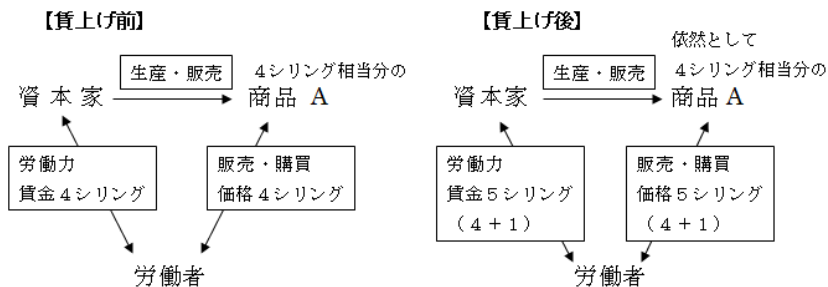
司会：では東口さん、レポートをしてみ、疑問点やわかりにくかったこと、また議論してほしい箇所などあればまず出してもらえますか？

東口：『賃銀・価格および利潤』の中で最も有名なスプーンとスプーニーの部分は何度聞いてもしっくりこないのです。教えてもらえればと思います。IU・スプーンの例えと、馬鹿げているという意味のスプーニーを言葉遊びしているんですね。

KH・スプ鉢という小さい鉢のなかに、イギリスの全生産物が入るわけがないという皮肉ですよ。そんなもので計れるものではない、例えのスケール

◆みんなの学習講座

●ウェストンの賃金額固定の前提



賃金額が固定のため、賃金が上がっても、同様の価値の商品価格に賃上げ分を上乗せするだけになる。

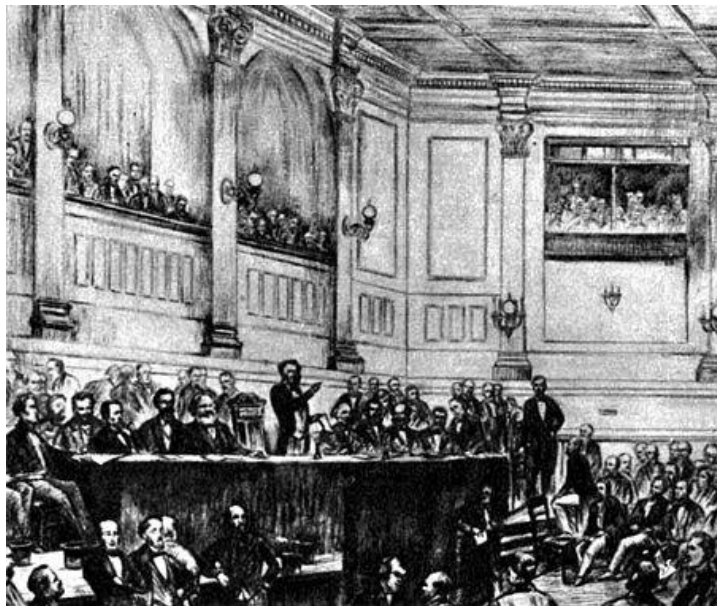
が小さすぎるだろうということだと思
います。

司会…スープ鉢の説明もありました
が、これはスプーンの大きさも考える
必要があるのではないでしょうか。ス
プーンの大きさ、つまり賃金を増やし
ても、スープ全体の量は増やさないと
ウェストンは述べているということだ
しょうが、そもそもそのスプーンの大き
きで労働者は生きていけていたのか
もっと大きくないといけなかったのか
はないかというのがありますが、どう
でしょうか。

東口…よく使われるパイの理論だと
思いますが、一人ひとりのスプーンを
大きくしてもスプーンの量は増やさな
いだろうということ、そのものに問題が
あります。ウェストンの主張はまさに
生産物の量は固定というところから出
発しているのです、このような無理が生
じているのですが、スプーンの量が固定
であれば、スプーンが大きくなると、

すくえた人は今までよりも多くのスー
プを飲めますが、全く飲めない人が出
てきます。実際は生産力が上がれば生
産物の量、いわゆるスプーンの総量も増
えて大きな鉢に変えなくてはいけない
し、スプーンの大きさも大きくなって
いくはずですが、やはり固定ありきの前
提がおかしいのです。

須藤…ウェストンは労働者のスプーン
を大きくしても、スプーンの量は変わら
ないのに無駄であるという言い方をし
ています。そこから思い出したアグリ
ツパの話で、貴族がお腹一杯になれば
平民もお腹がふくれるだろうというこ
ろ、安倍政権も同じようなことを言
っていました。資本家が儲かれば労働
者にもおこぼれがあるというトリクル
ダウンです。結局我々労働者には何一
つこぼれ落ちてこなかったけれど、そ
もそもウェストンのいうスプーンの大
きさは変えたくても変えられないとい
うことを忘れてる。全て固定だとい



第一インターナショナル発足集会（1864年9月28日 ロンドン）

った前提そのものが崩れているのです。わかりづらい例えではありますが、労働者の取り分は実際今少なすぎると言うということを行っています。

ウェストンの目くじまの主張

H S : 東口さんの図解でよく分かった

のですが、「労働者階級が資本家階級を強要して、貨幣賃金の形で四シリングの代わりに五シリングを支払わせるのならば、資本家は商品の形で（五シリングの代わりに）四シリングの価値を返すであろう。労働者階級は、賃金の騰貴以前に四シリングで買ったものに五シリングを支払わねばならぬであろう。」というところは、これまで文章で読んでもモヤモヤしていたんです。東口 : あくまでウエス

トンが「賃上げは無意味ですよ。労働者のためになりませんよ。」ということを意識付けするために単純に賃上げした分を商品価格に足したという説明になります。本来はこんなことになりませんが、あくまでウェストンの目くじまの主張になります。

会社あつての労働者

T G : しかし賃金が上がれば商品の価格が上がるといふのは、今も資本家側はよく使いますよね。

柳本 : 現在もそうですが「会社あつての労働者という思想」というのはその当時でも拡がつており、ほとんどの労働者がそう思われていたので、マルクスの演説は必要であつたのです。

Y M : 私は当時の人たちは、マルクスの演説をかなり理解したのではないかと思つています。というのもこの演説の後、マルクスは信頼されてインター

◆みんなの学習講座

ナショナルでの役職も上がっていったということがあるからです。

東口：僕はこの講演だけではそれほど理解されなかったと思っています。1865年5月2日と20日の中央委員会の会議において、ウエストンは特別講演で彼の思いつきを説明し、その講演が討議されました。マルクスは5月20日付の手紙でウエストンの主張についてエンゲルスにこう書いています。「(これを信じているのはわれわれの間では彼だけであるが、)もしこの二つの命題が是認されるならば、当地の労働組合に關しても、大陸で蔓延しているストライキ病に關しても、漫画のようなものになる。もちろん私が反駁(他の意見に反対し、論じ返す)するが、それよりも自分の著書『資本論』を書き続けることの方が重要だと考えたので、即席の考えでこの反駁をおこなうことにする。と。しかし、ここで論争される全ての経済上の諸問題

を、理論的準備のない人たちに説明することはそう簡単ではない。君だつて経済学の課程を一時間に圧縮することはできないだろう。だがわれわれは最善をつくそう。」ということで、本来は少し先に完成する『資本論』を世に出し、労働者のたたかに勢いをつけたい思想があり、今ウエストンのような小物に反論するために、その内容をつまんで先出しすることが得策なのかを悩んでいます。つまりはこの内容だけでは十分に説明しきれないことを分かった上で演説しているのです。

生産手段生産部門と

消費手段生産部門

司会：次に、労働者の賃金が上がった場合に、それまではやっと食べていけるだけしかもらえてなかったものが、少しくらい上がったとしても結局生活必需品に消費されるので、需要と供給

の関係で価格は上がる。価格が上がる和生活必需品の生産をしている資本家は、賃金を上げた分をその上上がった価格で取り返すことができる。一方奢侈品(ぜいたく品)の方は逆になるということでした。ここを討論したいと思います。

須藤：この部分は、『資本論』の第2巻20章第4節、岩波文庫では第5分冊に当たります。生産は生産手段生産部門と消費手段生産部門に分かれています。どちらの労働者も生きるために消費する必要がありますが、その中でも生活必需品と奢侈品という消費に分かれます。労働者賃金が上がると、生活必需品を購入する。資本家もまた当然生活必需品を購入するけれども、裕福なため奢侈品も購入する。生活必需品の需要が上がるということは、最初は供給が追い付かなくなるために、価格が上がります。ところが資本家は儲かるところに群がるため、生活必需品

◆特集 みんなの学習講座

の生産者が増えれば供給が増えて、結果価格は下がります。一方、資本家は労働者の賃金を上げたために儲けは減ります。すると奢侈品の購入を抑えるようになり、結果奢侈品は売れないため価格が下がります。そういうようなことがここでは書かれています。

資本と労働の移動

AD：資本と労働は利益の少ない部門から利益の多い部門に移動され、この移転の過程は、供給が一方の産業部門では需要の増加に比例して増加し、他方の産業部門では需要の減少に応じて減少まで続く。この変動が生じたのち、一般利潤率は種々の産業部門で再び平均化されるとありますが、これはどういうことでしょうか。

須藤：剰余価値率（一般利潤率）の平均化ということが出てきますが、これは『資本論』第3巻、岩波文庫では第

6分冊に書かれています。自由競争時代なので、資本は儲けのあるところに移動し、儲けがなければ撤退する。古典的・自由競争の時代の重要なことは、この「資本の移動の自由」があるということですよ。日本でもカネボウは、昔は紡績会社でしたが、今は化粧品メーカーとしての知名度が上がっています。儲けられる部門に自由に移動をするのです。あらゆる資本がめまぐるしく変化していくなかで平準化していくのです。

ON：レポートのなかでも説明がされましたが、儲けのない部門に資本家はいつまでも投資はせず、儲けの出る部門に移動していくことが今のところですね。

KH：徳島県の大企業・大塚製菓は、まだ儲けを出していた検査部門を他社に売却したのです。でも利潤率が下がってきたということで、そういう対応を取ったようです。

司会：企業は儲けに敏感なのです。そうでなければ企業ではない。こだわりの捨てて儲けがまだあるうちに早めの対応を取っているということですね。**YM**：資本の移動はこのコロナ禍でも顕著でしたね。マスクの製造や販売を始める企業が一気に増えました。

司会：第2章前半の討論はここまでとします。この前半でマルクスは「全国民の生産量も労働者に支払われる賃金も不変であるから、労働者の賃上げは物価騰貴を招くため、賃上げは無意味だ」というウエストンの主張を批判したことは理解しておきましょう。

後半（p 30・11行～p 39）は各国の統計や具体例を用いてウエストンの主張を批判していきます。来月号のレポートを楽しみにしましょう。